

保育園実習 4日間の戸惑い場面における看護学生の子どもとの関わり方の変化

網野裕子 高橋紀美子

要旨 本研究は、保育園実習 4日間の戸惑い場面における看護学生の子どもとの関わり方の変化を明らかにし、4日間の保育園実習の効果を検討することを目的とした。小児看護学実習で4日間の保育園実習を行った学生16名の実習記録（1日の所感・考察）の中で、実習1～4日目までの子どもとの関係における学生の戸惑いに焦点をあて質的に分析した。その結果、学生の戸惑い場面における子どもとの関わり方は実習1～4日目にかけて変化しており、学生は、戸惑いながらも保育士をモデルとして子どもと関わっていくことにより、次第に子どもに対応できるようになっていた。学生が子どもとの関わりを主体的に実践できるようになることは、小児看護学実習にとって意義があると考えられる。そのためには4日間の保育園実習が望ましいことが示唆された。

キーワード：保育園実習 4日間、看護学生、戸惑い、子どもとの関わり方

1. はじめに

小児看護学実習における幼稚園・保育園実習は、健康に生活している子どもと関わり、それにより健康を害した子どもの援助を行う視点を育てる上で、大切な学びの機会（岸川・田村，2000）といわれており、看護系大学では、多くの大学で実施されている（飯村・伊藤他，2001）。本学でも「子どもとの直接的なかかわりから、小児期の成長・発達を体験的に捉え、子どもの特性を理解する」ことを目標の1つとし、4日間の保育園実習を小児看護学実習に取り入れている。

幼稚園・保育園実習前後の子ども観や子どものイメージを比較した研究では、「健康な子どもの実態を理解し、健康な子どもを肯定的にとらえることができるようになった」（遠藤・後藤，2004）、「保育園実習を通して子ども観が一般的・通俗的なものから看護の実践に即したものと変化する」（東野・松木他，2005）、「幼稚園・保育園実習は学生に子ども観を否定的から肯定的に効果的な変化をもたらし、さらに拡大させている」（高橋，2007）、「保育実習により多項目にわたりこどものイメージが強く

なっていた」（内田・古谷他，1993）、「幼稚園・保育園実習を経験することにより子どもに対する肯定的なイメージが強まる」（牛澤・北島，1995）などの結果が得られている。また、小児看護学実習における学生の困惑やその対処方法については、小口・関他（2002）、関・菅谷他（2003）、上村・重松他（2007）が小児病棟における学生の困惑を明らかにしている。

しかし、保育園実習において学生の子どもに対する認識や関わりが日々どのように変化しているのかを明らかにした研究や、保育園実習における学生の戸惑いを明らかにした研究は少ない。少子化が進む近年、学生が子どもと触れ合う機会は少なく、子どもとの関係性を築くことに戸惑う学生は少なくない。そこで本研究では、保育園実習4日間の戸惑い場面における看護学生の子どもとの関わり方が日々どのように変化しているのかを明らかにし、4日間の保育園実習の効果を検討することを目的とした。

II. 研究方法および対象

1. 対象

小児看護学実習で保育園実習を行った看護学生39名（3年生～4年生）のうち、連続した4日間の保育園実習を行った学生16名を分析対象とした。この4日間の実習は2月の同時期に行われた。

2. データ収集方法

学生が保育園実習中に記述した実習記録（毎日の記録 1日の所感・考察）を質的に分析した。この「毎日の記録」は、保育園実習中の昼休憩もしくは夕方に保育園で記述し、その日のうちに保育園へ提出するものである。実習終了後、各保育園から大学へ返却される。その後、一度学生へ返却し、病棟実習の記録と合わせて再提出される。

3. 倫理的配慮

学生に研究の主旨、個人が特定されることはないこと、拒否を理由に不利益にはならないことを口頭及び文章で説明した。その上で、承諾が得られた学生を対象とした。

4. 分析

「毎日の記録」の中の「1日の所感・考察」の自由記述の中で、実習1日目から4日目までの子どもとの関係における学生の戸惑いに焦点をあて、これが記述されている文章や段落を文脈上の意味を損なわない範囲内で区切り、1日目から4日目に分けて抽出した。その後、それぞれにおいて場面類似性の分析を行った。会話によるコミュニケーションが難しい0～2歳児との関わりと、日常会話がほぼ可能になる3～4歳児との関わりでは、学生の戸惑いは異なると推測し、0～2歳児・3～4歳児の2つに区分し、分析した。また、戸惑い場面の内容分析は0～2歳児クラスを対象とした。なお分析にあたっては、小児看護学実習を指導している研究者2人が討議し分析を行った。

III. 保育園実習の概要

本学の小児看護学実習の期間は保育園実習約1週間、小児病棟実習2週間の計3週間である。このうち、保育園実習は臨地実習4日間と、学内における準備やまとめ2日間で構成されている。保育園実習中に祝日が入れば臨地実習を3日間としている。実

習は計9カ所の保育園で協力を得ており、すべて公立保育園である。保育園実習後に小児病棟実習を行っている。

実習の展開方法としては、1週目の水曜日は学内でオリエンテーション及び準備、土を除く木曜日～火曜日の4日間を臨地実習とし、2週目の水曜日に学内でまとめを行っている。1保育園では2～3名の学生が実習を行う。実習期間中は1名の学生が、年齢別で編成されている1クラスを継続して受け持つ。なお、受持ちクラスは学生の希望が考慮されている。また、クラスの保育士の数は、乳児3人につき1人以上、1歳以上3歳未満児6人につき1人以上、3歳以上4歳未満児20人につき1人以上、4歳以上児30人につき1人以上と児童福祉法第45条の規定に基づいた児童福祉施設最低基準第33条により定められており（厚生労働省、2008）、学生は多くの保育士と関わる機会を得ている。

IV. 結果

1. 受持ちクラスの子どもの年齢及び人数

受持ちクラスの子どもの年齢及び人数を表1に示した。0～2歳児クラスの子どもの数は9～23人、3～4歳児クラスの子どもの数は19～30人であった。この受け持ちクラスの年齢はその年度の4月の時点での年齢である。実習は2月であったため、ほとんどの子どもが1歳上の年齢に達していた。

2. 学生の戸惑い場面

1) 戸惑い場面件数（表2）

0～2歳児クラスを受け持った学生は1日目11件、2日目6件、3日目5件、4日目6件の戸惑い場面を記述していた。3～4歳児クラスを受け持った学生の戸惑い場面は1日目1件、2日目2件、3～4日目は0件であった。

以下は、0～2歳児クラスの戸惑いを分析した。

2) 実習1日目の戸惑い場面

実習1日目の戸惑いは以下の5場面であった。

(1) はじめ（3件）

初めて子どもと出会ったとき、学生は「どう接したらよいのか」と困惑していた。

事例 “はじめはどう接したらいいのかに戸惑うこともあ

ったが、時間が経つにつれてだんだんと遊びに入っていけるようになったり、コミュニケーションがとれるようになっていけたように思う。”(1歳)

学生は、「時間が解決してくれる」「だんだんと遊びに入っていける」「できるだけ多くの子と触れ合う」などを体験していた。

(2) つい手を出した(3件)

子どもに対して手助けをする場面では、学生は「本当に手助けしてよかったのか」「この子はどこまでできるのか」と、かかわりながら結局は手を出してしまったことに悩んでいた。

事例“「この子がどこまでできるのか？」ということが、まだよくわからないというのがあるが、つい手を出してしまっただけだったというように思う。明日はこの点に気をつけながら、子どもとかかわりをもっていきたいと思う。”(1歳)

学生は、「明日はどこまでできるのか気をつけてかかわりをもとう」「見極め(観察)が必要である」と課題意識を持っていた。

(3) クラスの子どもは大勢(2件)

学生は「一度に数人の相手をするのは難しい」「危険なことについての配慮が行き届いていなかった」と、1人の子どもとかかわっているときでもその他大勢の子どもに対して配慮することが必要だと気付いていた。また、その難しさを感じていた。

事例“一人に集中してかかわりを持っていると、他の子(全体)に目がいかないということがよくあり、・・・(略)・・・特に、危険なことについての配慮が行き届いていないということを切に感じた。明日はこの点に気をつけながら、子どもとかかわりをもっていきたいと思う。”(1歳)

学生は、「一人一人に目を向けて相手ができるようにする」「明日は気をつけてかかわりをもつ」と意図的行動をとろうとしていた。

(4) 効果的な言葉かけができない(2件)

学生は、「危険行為をする子に対し、いけないこ

とだと伝わるような怒り方が難しい」「注意するときや褒めるとき、どのような言葉をかけたらいいか」と、子どもに対する言葉かけに難しさを感じていた。

事例“子どもが危険なことをしたり、他の子に対して危険があることを行った時は怒る。怒ることは難しいと思った。その子が「いけないことだ」と気付くことができることが大切だと思うが・・・(略)・・・怒り方にもコツ(効果的な行い方)がある・・・(略)”(0歳)

学生は、難しさを感じながらもダメなことはダメと伝えなければと思い、「保育士の対応を参考にすること」で、子どもに対しての効果的な言葉を探していた。

(5) 指示どおりに動かない(1件)

学生は、「座り込んで立ってくれない子に対してどのように対応するべきか」と、予測できない子どもの行動に戸惑っていた。

事例“私が手を繋いでいた子が砂場に座り、帰ろうといってもなかなか立ってくれなかった。やはり、「自分がしたいことをする」という気持ちが大きいようで、とても困った。無理やり連れていくことはしたくないが、なかなか立ってくれない場合、どのように対応するべきなのか、疑問に思う。”(0歳)

学生は、子どもがしたいことを中断させることに対し、どのようにすれば上手に対応できるか探していた。

3) 実習2日目の戸惑い場面

実習2日目の戸惑いは以下の2場面であった。

(1) 効果的な対応や言葉かけができない(4件)

「物の取り合いやもめているときに対応できない」「子ども達を注意しなければならないが、上手く叱れない」など、学生は自分の対応に悩んでいた。

事例“今日は注意しなければならない状況になることが多く、その時の対応の甘さを自分自身で痛感した。子どもにとって、怒るということが必要であるが・・・(略)・・・上手く叱ることができないので、他の先生達

の言動や態度からそういったことを学んでいきたい。”
(2歳)

学生は、注意したり怒ることの難しさを感じていたが、「保育士の対応を参考にする」と、保育士の行動や態度から学ぼうとしていた。

(2) 指示どおりに動かない (2件)

学生は午睡の時間に「寝てくれない子を寝かすのは難しい」と感じたり、「子どもの考えがわからず、どう対応したらよいのか分からない」と悩んでいた。

事例 “子どもを寝かすために抱っこしていたが、なかなか寝てくれなかった。布団に寝かすと・・・(略)・・・先生にかわると、すぐに寝ていたので、驚いた。・・・(略)なかなか寝てくれない子を寝かすのは本当に難しいと感じた。” (0歳)

学生は、抱っこしても寝ない子にほとんど困り、「保育士の対応を参考にしよう」としていた。

4) 実習3日目の戸惑い場面

実習3日目の戸惑いは以下の3場面に分類できた。

(1) 効果的な対応や判断ができない (3件)

学生は「この年代の子 (0歳児) が嘔むというのは気持ちの表現方法であるが、どう対応したらよいのか」「食事のとき、適切な食事量の判断が難しい」と感じていた。子どもの行動の意味は理解したが、効果的な対応ができないと戸惑っている。

事例 “今朝、AくんがBちゃんをかむということがあった。・・・(略)・・・両者にどのように対応すればよいのかよくわからず、今日も最初は戸惑ってしまったが、保育士さんの対応を参考にして実施することで・・・(略)・・・。” (0歳)

学生は、「保育士の対応を参考にする」「日々その子と関わっていく中で、しっかり観察する」と、自分からやってみようとしていた。

(2) どこまで手をだしていいのか (1件)

学生は「着替えのときにどこまで手伝ってよいの

か」と戸惑っていた。子どもの「やって」との求めにどこまで手を出していいのかと、3日目でも迷っていた。

事例 “やっぱりトイレとかパジャマの着替えのときにどこまでできるのか、どこまで手を出していいのか難しかった。前よりはだいぶわかりかけてきたけど・・・(略)・・・” (1歳)

しかし3日目になると、学生は「前よりはわかってきた。甘えたい気持ちは受け止め、できるだけ自分でできるところはしてもらえるようにする」と対応していた。

(3) 指示通りに動かない (1件)

「言うことを聞かない子に対し、どうすればよいのか」と悩んでいた。

事例 “言うことを聞かない子どもへの対処法についてとても悩んだ。” (1歳)

5) 実習4日目の戸惑い場面

実習4日目の戸惑いの分類は以下の1場面であった。

(1) 効果的な対応ができない (6件)

「言葉で上手く表現できず、ケンカ (いざこざ) が多い」「学生の膝に乗っている子を押しつけて座ろうとする子に、いけないことをどう伝えるか」「走り回って暴れる子をどう止めるか」などと悩んでいた。

事例 “0, 1歳ということで言葉で上手く表現することができず、ケンカも多く対応に困ることもあったが、日が経つにつれて対応できるようになり・・・(略)・・・。” (0歳)

学生は、「4日目にはこどものいざこざにも対応できるようになった」と受け止めていたり、「他の子にも向き合う」「力づくでなく言葉をかけることが必要」と感じながら、子どもと関わっていた。

このように、戸惑い場面における、学生の子どもの関わり方は4日間で「観察」から「実践」に変

化していた。

V. 考察

1. 年齢による戸惑い場面件数の違い

0～2歳児クラスの受持ちになった学生は、3～4歳児クラスの受持ちになった学生よりも戸惑い場面を多く記述していた。3～4歳ごろの幼児は日常会話がほぼ可能になり、発音もはっきりする(奈良間他, 2007)。しかし、0～2歳児はまだ会話によるコミュニケーションが難しい。また、1歳3ヶ月頃から大人の言うことが分かるようになり、呼びかけたり、拒否をあらわす片言を盛んに使うようになり、言葉で言い表せないことは、指差し、身振りなどで示そうとする(石井他, 2005)。よって、言語的コミュニケーションに慣れている学生は、身振りや手振り、視線などのコミュニケーション手段を主として用いる0～2歳児の対応に困難を感じていると考えられる。

2. 戸惑い場面における学生の日々の変化

実習1日目の戸惑い場面の特徴としては、第一に、「初めて子どもと出会ったとき」及び「1人の子どもへの関わりとその他大勢の子どもへの関わり」という場面が記述されていることがあげられる。実習1日目は、学生が「初めて」子どもたちに出会う日である。そこで、ほとんど子どもと接したことのない学生は、まず子どもとどのように接すればよいかわからず戸惑っている。東野・松木他(2005)は「保育園実習前の看護学生は子どもを不安や戸惑いの源泉、未知なるものと捉えている」と述べているが、初めて子ども達に出会った学生も、子どもを同様に捉えていると考えられる。また、学生は、保育園の性質上大勢の子どもと接することになる。子どもは、乳幼児期を通じて、大人との交流、応答や大人から理解されることを求めている(石井他, 2005)。つまり、乳幼児期の子どもは集団でも「自分と大人」のかかわりを求める時期である。学生は普段そういったかかわりを求められることはほとんどない。そのため、一人の子どもと関わっているときでもその他大勢の子どもに配慮する必要があることに気づきながら、その難しさに戸惑っていると考えられる。第二の特徴は、戸惑ったときの対応策が「時間が解決してくれる」「明日は気をつけてかかわりをもつ」「考えていきたい」等、具体的で

ないという点である。「保育士の対応を参考にする」という対応策を考えている学生は、1日目はまだ少ない。このことから、子どもに対し具体的にどのように関わっていったらよいのかがわからず、自分から働きかけられないで立ちつくしている学生の姿が浮かび上がる。初日でまだ周囲を観察するほど自分自身に余裕がない。しかし、実習はまだ3日間あるため、自分がどのように関わられるか考えていこうとしていると考えられる。

実習2日目は、戸惑ったときの対応策として、ほとんどの学生が「保育士の対応を参考にする」と記述していた。高橋・網野(2005)は「学生が子どもとかかわるための手がかりの提供者として保育士の存在がある」と述べている。学生は、身近なモデルとして保育士の対応を観察し、参考にすることにより、子どもへの対応を行っていくという考察に至ったと考えられる。学生が少しずつ自分から動き始めたといえる。

実習3日目は、戸惑ったときの対応策として、自分なりの対応が少しずつ具体的に出てくるようになっていた。実習が3日目になり、戸惑いはあるものの、自分に出来ることをしていこうとする学生の姿がある。それは、3日間、子どもと直接触れ合うことにより、子どもの特性を理解し始めたことが1つの要因と考えられる。どう接すればどのような反応が返ってくるのかといった具体的な反応が予測でき始める時期だといえる。

実習4日目の戸惑い場面の特徴としては、第一に、「効果的な対応ができない」場面のみ記述であったことがあげられる。これは、子どもと関係が形成されたことにより、より子どもと接近することができ、こういった場面に遭遇する機会が増えた為と考えられる。また、実習最終日のため、「もっと子どもと関わりたい」と考えて行動した結果ともいえる。第二の特徴として、戸惑いに対し、日が経つにつれて対応できるようになったとしているところである。また、うまく対応ができなくても3日目よりさらに具体的に対応策を考えることができるようになっていた。立ちつくしている学生の姿はもはやなく、むしろ積極的に子どもと関わり、達成感を得ている学生の姿がそこにある。これは、4日間試行錯誤しながら子どもとかかわってきたことから生じたものと考えられる。

3. 保育園実習4日間の意義

実習1日目には子どもへの対応ができないと「立ちつくしていた」学生が、2日目から保育士の対応を観察し、参考にすることで「少しずつ動き出し」、3日目にはできるところを探して「自分から行動しはじめ」、4日目には「できるようになった自分を感じて」いた。東野・松木他(2005)は1日(8時間)の保育園実習において「看護学生の子ども観が一般的・通俗的なものから『発達する子ども』、『個別性のある発達過程途上の者としての子ども』という看護の実践に即したものと変化する」と、学生の子ども観の変化を見出している。確かに、子どもを知ることは、小児看護の実践につながるであろう。しかし、「知る」「わかる」だけではなく「できる」ようになることが、より看護の実践に即したものになるといえると考え。また、個々の子どもと関係を築くことができ、「出来る自分」に気付いた学生は、続いて行われる小児病棟実習に自信を持って臨むことができるようになる。本研究の結果より、子どもとの関わりが主体的に実践できるようになるには4日間の保育園実習が望ましいと推察される。

VI. 結論

保育園実習4日間の戸惑い場面において、看護学

生の子どもとの関わり方が日々どのように変化しているのか検討を行った。その結果、以下のような結論を得た。

(1) 0～2歳児クラスを受け持った学生は3～4歳児クラスを受け持った学生より戸惑いを多く感じていた。

(2) 学生の戸惑い場面における子どもとの関わり方は実習1～4日目にかけて変化していた。学生は、戸惑いながらも保育士をモデルとして子どもと関わっていくことにより、次第に子どもに対応できるようになっていた。そこから、学生は「できる」自分を見出していた。

(3) 学生が、子どもとの関わりを主体的に実践できるようになるには4日間の保育園実習が望ましい。

VII. 本研究の限界と今後の課題

今回、本研究の対象者が16名と少なく、この結果を一般化するには限界がある。今後、対象者数を増やして検討していく必要がある。また、保育園実習を3日間行った学生もあり、3日間と4日間で学習内容に差異があるか、また実習時期によって差異があるかどうかを検討していくことが必要であり、今後の課題である。

表1. 受持ちクラスの子どもの年齢、人数

学生	年齢	子ども数
1	0歳	9人
2		11人
3	1歳	12人
4		12人
5		13人
6		13人
7	2歳	16人
8		12人
9		15人
10		19人
11	3歳	23人
12		19人
13		21人
14	4歳	19人
15		27人
16		30人

表2. 戸惑い場面件数

年齢	戸惑い場面(件)			
	1日目	2日目	3日目	4日目
0歳	2	1	1	2
1歳	5	3	3	2
2歳	4	2	1	3
計	11	6	5	6
3歳	1	1	0	0
4歳	0	1	0	0
計	1	2	0	0

文献

遠藤芳子, 後藤順子 (2004). 小児看護学 (幼稚園)実習の有効性の検討—実習前後の看護学生の子ども観と実習のとらえ方の変化から—. 山形保健医療研究, 7: 33 - 40.

東野充成, 松木美奈子, 大池美也子 (2005). 保育園実習に見る看護学生の子ども観. 九州大学医学部保健学科紀要, 5: 77 - 86.

飯村直子, 伊藤久美他 (2001). 看護系大学における小児看護学実習の概要. 日本小児看護学会誌, 10 (2) : 16 - 21.

石井哲夫監修 (2005). よくわかる新保育所保育指針ハンドブック. 学習研究社.

岸川亜矢, 田村佳士枝 (2000). 小児看護実習前の保育所実習経験の効果～保育所実習を経験した学生と経験していない学生のアンケートの比較から～. 千葉県立衛生短期大学紀要, 19 (1) : 7 - 14.

厚生労働省 (2008). 児童福祉施設最低基準.

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S23/S23F03601000063.html>

奈良間美保他 (2007). 系統看護学講座専門22 小児看護学概論 小児臨床看護総論 小児看護学 [1]. 第11版. 医学書院.

小口多美子, 関美知代, 吉村由紀他 (2002). 小児看護学実習において学生が直面する困惑. 日本看護学会論文集 小児看護, 33: 148 - 150.

関美知代, 菅谷千恵子, 宮口恵美子他 (2003). 小児看護学実習において学生が直面する困惑への対処方法. 日本看護学会論文集 小児看護, 34: 56 - 58.

高橋紀美子, 網野裕子 (2005). 看護学生の保育園実習によるお楽しみ会 (遊びの会) の学び. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 12 (1) : 67 - 74.

高橋衣 (2007). 小児看護学実習における幼稚園・保育所実習の有効性の検討—幼稚園・保育園実習前後の子ども観の比較から—. 足利短期大学研究紀要, 27: 59 - 66.

内田雅代, 古谷佳由理他 (1993). 小児看護実習における学生のこどもに対するイメージの変化について. 千葉大学看護学部紀要, 15: 35 - 43.

上村まや, 重松由佳子他 (2007). 小児看護学実習における困惑した場面の要因及び学びの分析～看護場面の再構成を通して～. 西南女学院大学紀要, 11: 33 - 41.

牛澤美恵子, 北島靖子 (1995). 小児看護実習にお

ける学生の子どもに対するイメージの変化とその変化に影響を与える実習条件. 順天堂医療短期大学紀要6: 14 - 24.

A change in an interaction between student nurses and children in confusion through four days of practical training at a nursery school

Yuko Amino, Kimiko Takahasi

Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja-shi, Okayama 719-1197, Japan

Keywords : four days of practical training at a nursery school, a student nurse, confusion, an interaction between student nurses and children